

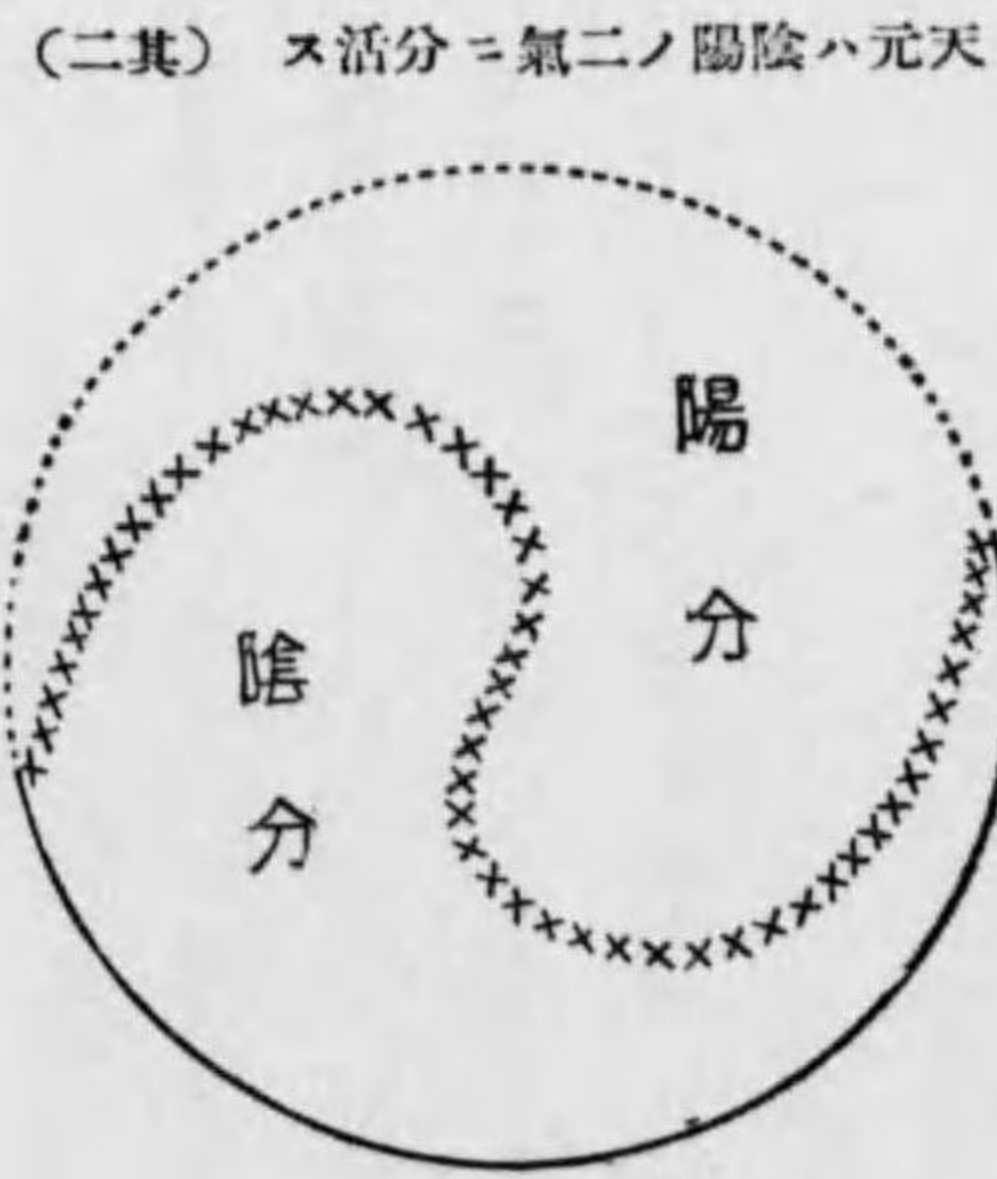
にせん。平淡なる食味は養分が濃厚ならぬと同時に毒素も亦稀薄である。故に輕身延年には食餌の淡泊化が無上に稱揚せられ、調理法の人文に關する至大なる關係も實に此に存する所以と爲す。

養生的主要する常食たる穀類は所謂身體の生命的滋補にして決して治病の能力は期待せられぬ。唯其れ疾病を未然に治して鍼灸藥餌を知らしめぬに重要な原理が歸着する。而して牛旁や人參や乃至大根蒟蒻眞鯉等々は、悉く是れ偏氣偏味のなる副食物である。今之を療病に利用して効果あるは則ち副食物を藥物化せしめたる者と謂ふべく、食物が治病したのではない。

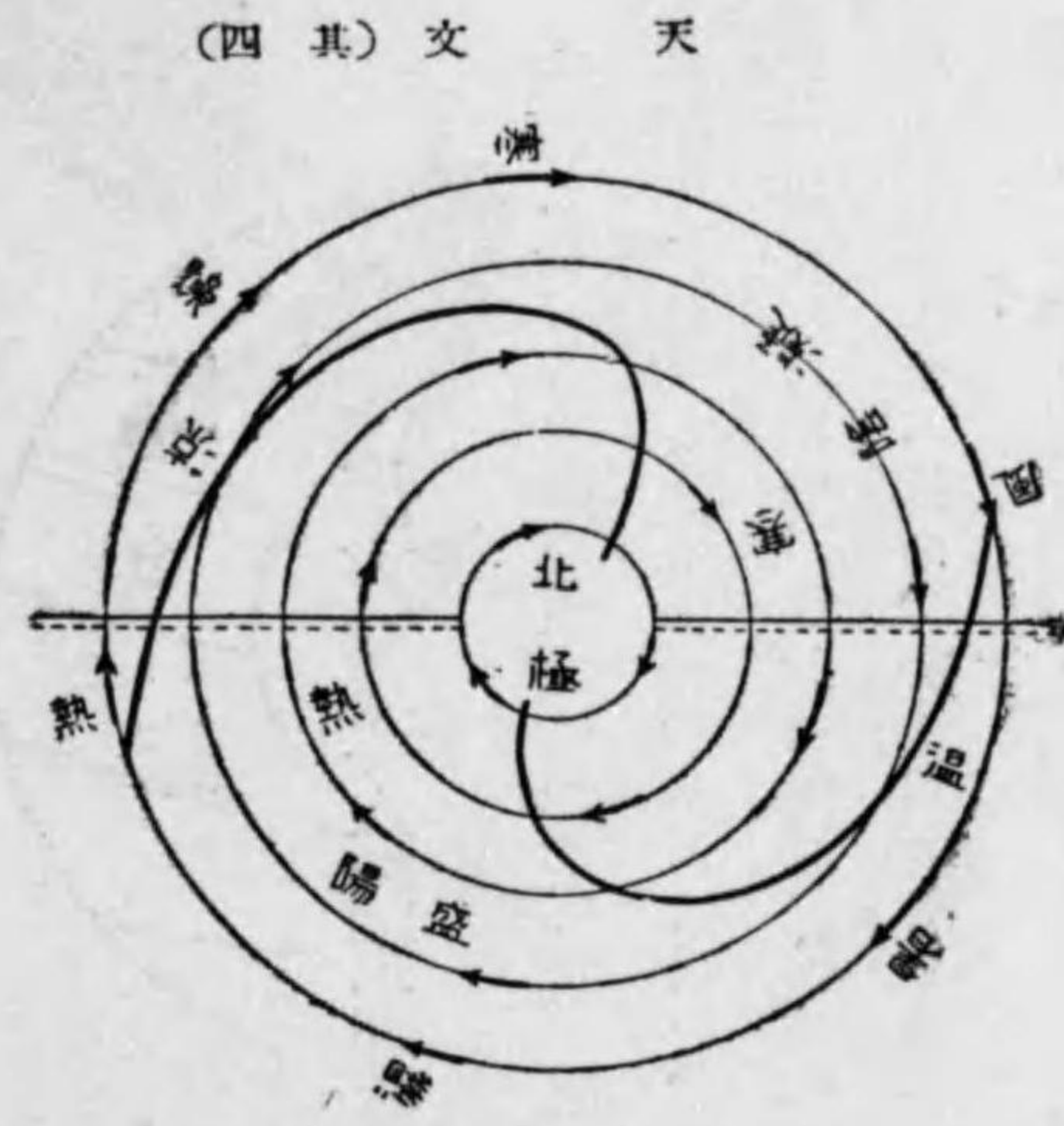
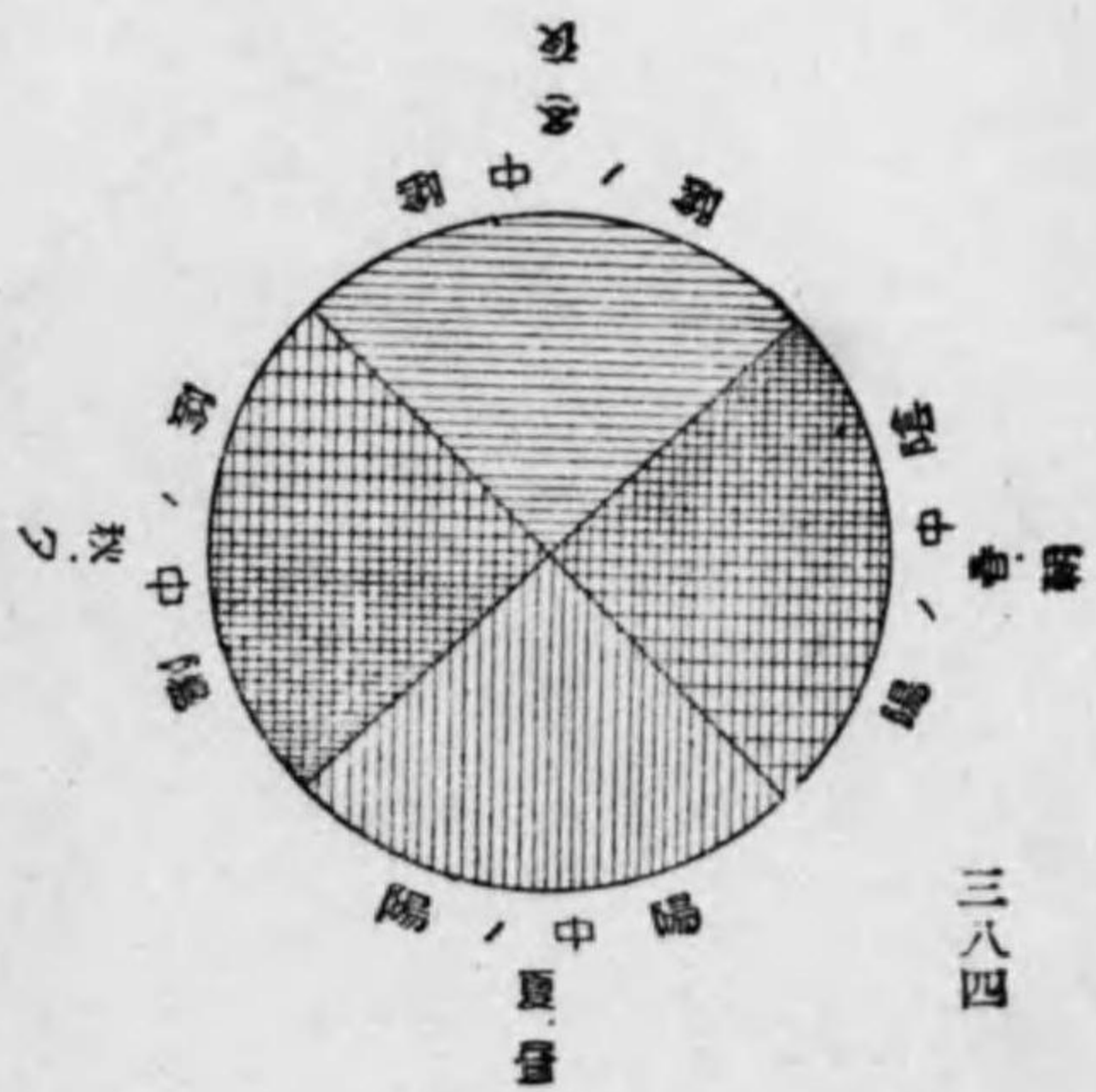
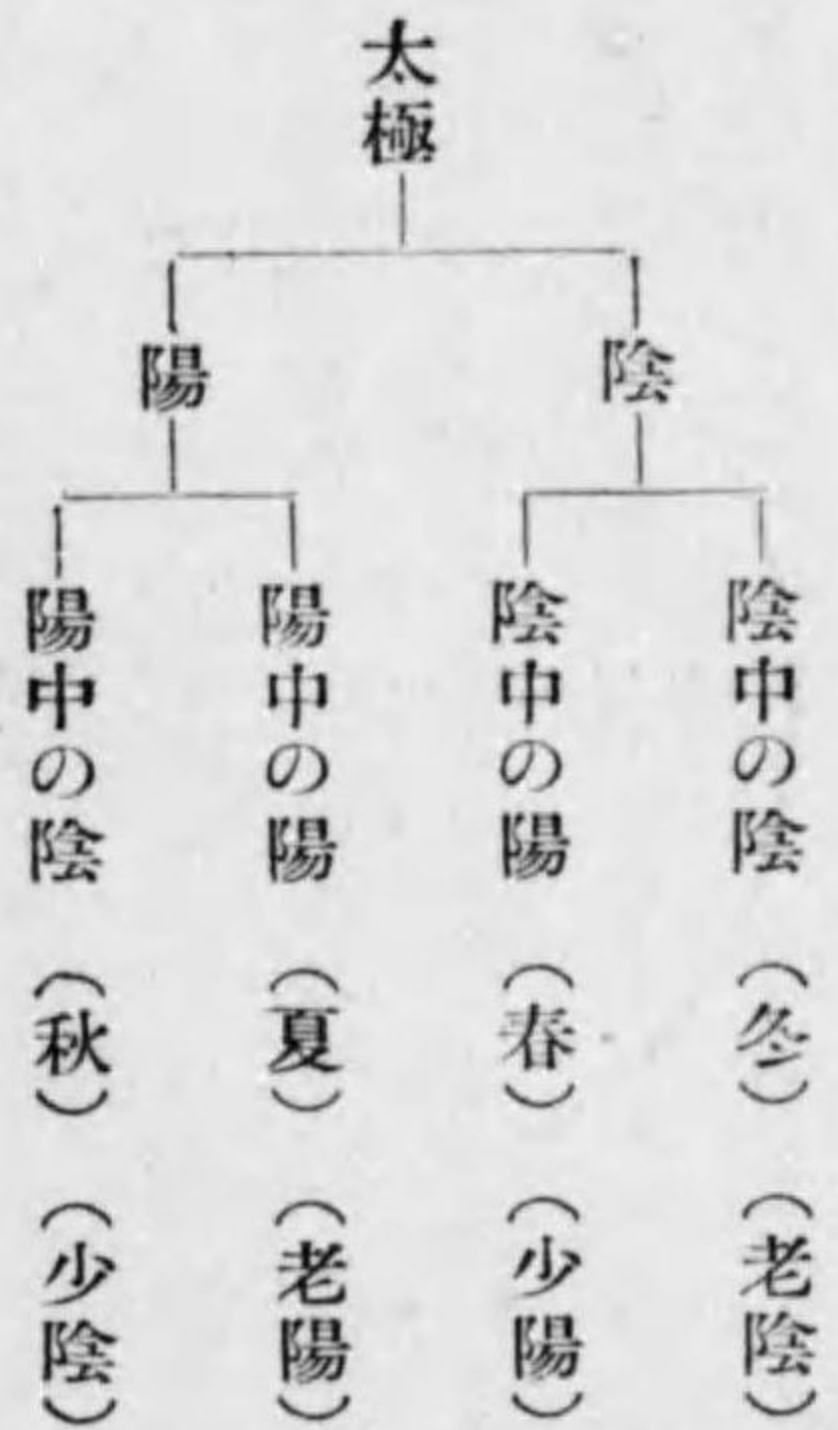
### 附 錄

#### 漢方醫道入門玄理原病式

東洋に於ける立學の系統は總じて先づ原理を創定して之を演繹することに成つてゐる、形而上に關する者も形而下に屬する者も悉皆然らぬはない、道德も政治も教育も醫道も乃至音樂美術工藝算數の小枝迄も其原理に立脚せぬはない、是故に此原理の組織及び術語などを熟知せねば醫書を繙けど五里霧中に彷徨するが如く容易に氷解せられぬ、於是其概略を圖解的に表出して研究者の便益に資せんとす。

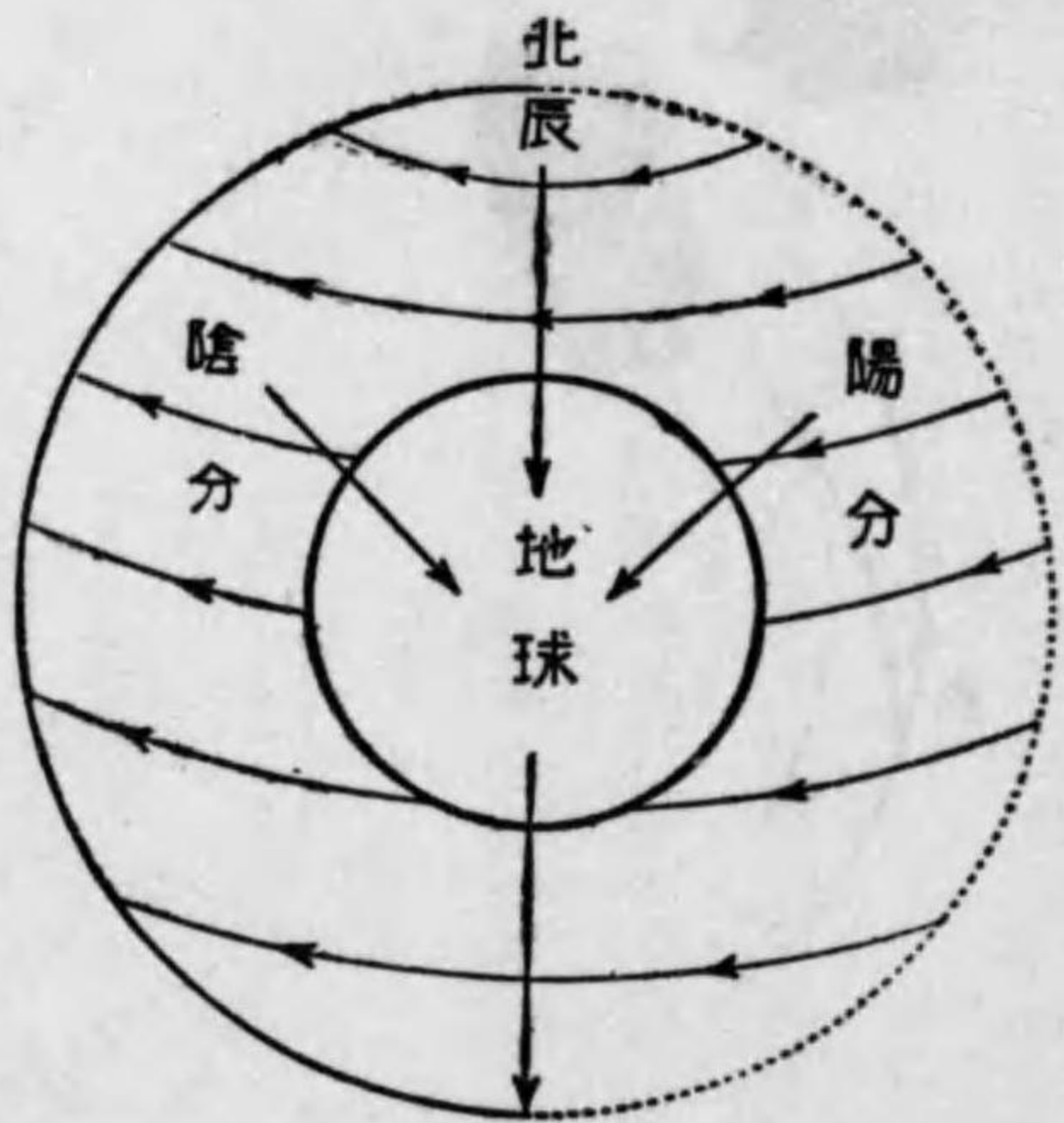






一氣の混沌が開闢して性の輕清なるは上つて天と成り、質の重濁なるは下つて地を成す、即ち天は氣にして陽であり地は形があつて陰である、而して其輕清の氣は北辰(極星)を中心に左旋して片時も息まぬ、日月星辰は之に律せられて萬古不易に左轉する、故に論語にも「北辰は其所に居て衆星が之に共あふが如し」と説かる、是に於て寒暑とが往來して四季を成し日月が代照して晝夜を分つ、星辰の出没と明暗とに依り季節が候はれ、二十八宿は日月の運行を調攝する、而して陽の精は太陽を氣化し陰が凝て太陰を氣化す、故に太陽の下照する時が天の陽にし

(五其) 天文



濕土用にして、之に熱を加へ天の六氣として旋轉息むなき者が下降して地氣に交はり萬有を布施する。

(太陽を中心として地球も月も星も其軌道を回轉し、又太陽は氣體とし月も星も地球と同様に物體とする、之が西歐の科學的學說である、東亞の窮理的學說は北辰を中心して天體(太氣)が左旋し、日月星辰は北辰の軌道を踏むと爲し、又地球以外の日月星辰は悉く孰れも氣體と推定する、故に太陽と地球とに遠心求心の理はなく、而して磁針の北を指す理より推して北辰と地球とに遠心と求心の關係ある理が究めらる。重濁なる陰氣が凝結して化成した者が物體地球である、地球は北辰を背とし北とし後とすれば、其反對側が面となり南となり前となる、而して日出の處は東にして左となり日没の處は西にして右となる、茲に地の





(七其) 文地



四方が成立する、東北を艮と爲し東南を巽と爲し西南を坤と爲し西北を乾と爲す、茲に地の四維が定立する、併せて之を八正又は八方とも云ふ。地は東が温、南は暑にして陽分に屬し、西は涼、北は寒にして陰分に屬する、中土は濕となる。

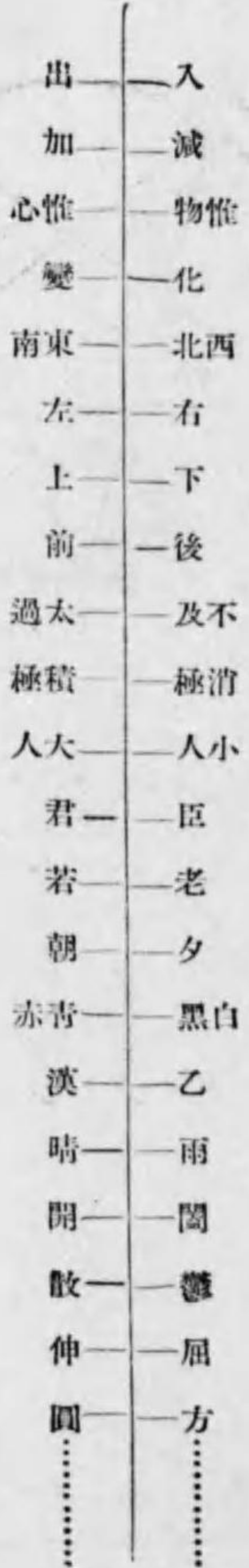
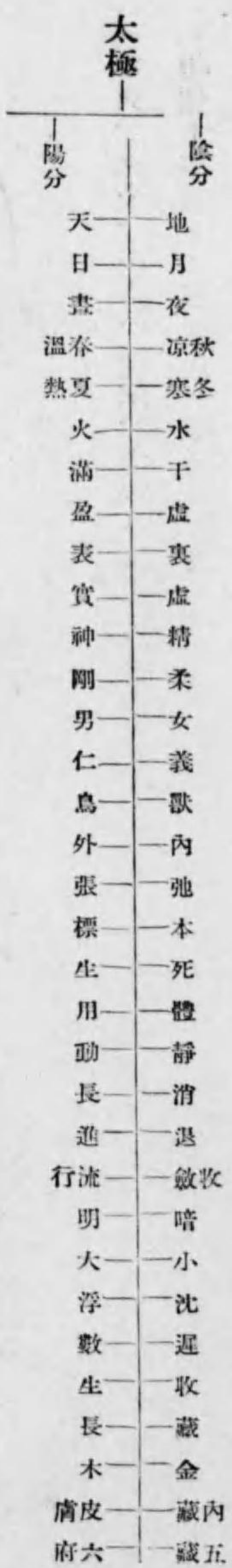
陰分の北地は高燥にして陽分の南地は卑濕なり、而して又陽地は沃饒

(八其) 文人令時



に植物の繁茂、動物の蕃殖、且つ其種類が頗る多く、陰地は磽确瘠土にして不毛の處が多けれど礦物は甚だ豊富である。

陽の表徴は火熱であり陰の現象は寒水である、此の水火の氣は絶えず下降し上升し天地の氣が相交つて氣が網縊するに因り萬有は生成化育する、即ち「天氣が普施し地氣が受育する」とは是れである、但天氣の至らぬ所があり地氣の及ばぬ所があつて、萬有の稟賦に個々の偏性偏質の生ずる亦免かれ難き所以と爲す。



右は宇宙の森羅萬象を表出せり、猶ほあるべし、推想に任せん。

五行の生尅及び王相圖表(其九)





五行相生  
 木ガ火ヲ生ジ  
 火ガ土ヲ生ジ  
 土ガ金ヲ生ジ  
 金ガ水ヲ生ジ  
 水ガ木ヲ生ジ  
 循環シテ已ムコトナシ

五行相剋  
 木ハ土ヲ剋シ  
 土ハ水ヲ剋シ  
 水ハ火ヲ剋シ  
 火ハ金ヲ剋シ  
 金ハ木ヲ剋ス

「木火、火土、土金、金水、水木ハ母子ノ關係ナリ」  
 「相生ト相剋トノ關係ヨリ勝復ヤ承制ノ理ガ發スル」  
 「木ガ王スレバ木ノ子ナル火ガ相トナリ、木ガ勝ツ所ノ土ガ死トナリ、木ガ勝レル所ノ金ガ囚トナリ、木ノ母ナル水ガ老トナル、他ノ火土金水モ之ニ準ジテ知ルベク、而シテ之ヲ時ニモ日ニモ月ニモ五歲ニモ世他萬般ニ適用セラル」

五行説は數理的に明確な解決を與へぬからとて之を排斥するは早計であると思ふ、若し之を三五の十八なる哲理的に攻究すれば、絶對眞理ならぬとしても妙理の存する所を發明せらる。

五行(五大原素)配當圖表

五行	木	火	土	金	水
蒼天	丹天	靑天	素天	玄天	
歲星	熒惑星	鎮星	太白星	辰星	
甲木ノ兄 乙木ノ弟	丙火ノ兄 丁火ノ弟	戊土ノ兄 巳土ノ弟	庚金ノ兄 辛金ノ弟	壬水ノ兄 癸水ノ弟	
王	相	死	囚	老	
卯寅	午巳	辰未 戌丑	酉申	子亥	
木運 壬丁	火運 癸戊	土運 己甲	金運 庚乙	水運 辛丙	
厥陰 巳亥	少陰 午子	太陰 未丑	陽明 酉卯	太陽 戌辰	
厥陰 風木 (肝)	少陰 君火 (心)	太陰 濕土 (脾)	陽明 燥金 (肺)	太陽 寒水 (腎)	
春	夏	土用	秋	冬	
溫	暑	濕	涼	寒	
風	熱	燥	寒	寒	
君火 相火	君火 相火				
六氣	六氣				
六紀	六紀				
六季	六季				
六支	六支				
十二支	十二支				
五運	五運				
五相	五相				
五星	五星				
五天	五天				
附錄					







九星	八卦	四獸
三碧	震 ☳	青龍
九紫	離 ☲	朱雀
五黃		
七赤	兌 ☱	白虎
一白	坎 ☵	玄武 (龜)

以上は悉く五行に配當せらる、猶ほ有るべし。

奇經八脈	七診	六脈	六脈	三部九候	四隅
任脈	陰維脈	獨大	浮	寸 (浮中沈)	東北
督脈	陽維脈	獨小	沈	關 (浮中沈)	東南
衝脈	陰蹻脈	獨疾	遲	尺 (浮中沈)	西南
帶脈	陽蹻脈	獨遲	數		西北
		獨熱	滑		戊亥
		獨寒	濇		未申
		獨陷下			坤 ☷
					乾 ☰
					天門
					六白 (金)

八新	六陳	三白	十劑	七方	四海	八會	七衝門
槐花	紫蘇	狼毒	重	宜	大	氣ノ會 (三焦)	飛門 (唇)
深蘭	薄荷	葱	滑	通	小	腦髓ノ海	戶門 (齒)
欵冬花	菊花	蒜	澁	補	緩	膈中 (氣ノ海)	吸門 (會脈)
	桃花	蘿蔔	燥	瀉	急	胃 (水穀ノ海)	賁門 (下極即肛門)
	赤小豆	吳茱萸	濕	輕	奇	骨ノ會 (大杼)	賁門 (會脈)
		半夏			偶	衝脈 (血ノ海)	賁門 (胃上口)
		橘皮			複		
		枳實					
		麻黃					

藥種量衡比較概表



漢

日

本

附子	同	同	枳實	梔子	大棗	一	一	一	一	一	一								
一	三	四	五	十	十							升	合	錢	觔	兩	銖		
枚	枚	枚	枚	枚	枚										(斤)				
三	二	三	四	三	三							一	一	八	十	一	四		
兩	兩	兩	兩	兩	兩							合	勺	分	錢	錢	厘		
五味子	同	半夏	蜜蟲	同	水蛭	同	桃仁	同	同	同	杏仁	括蕒實	烏頭	大附子					
一	半	一	二	二	三	二	五	半	四	五	七	大	一	一					
升	升	升	個	個	個	個	個	升	個	個	個	個	枚	枚					
五	四	一	一	一	一	四	四	三	三	五	三	一	六						
兩	兩	兩	兩	兩	兩	兩	兩	兩	兩	兩	兩	兩	兩	兩					

附錄

蜜	麻	膠	赤小豆	香豉	麥門冬	吳茱萸	粳米
一	一	一	一	二	一	一	一
升	升	升	升	合	升	升	升
五	六	二	十	一	八	五	十
十	十	十	二				二
錢	兩	錢	兩	兩	兩	兩	兩
烏梅	竹葉	厚朴	葱白	同	同	芒硝	
三	二	一	四	基	雞	一	
百				子	子		
個	把	尺	莖	大	大	升	
三	四	半	四	半	半	十	
十							
兩	兩	斤	兩	兩	斤	兩	



昭和八年十月二十七日 印刷  
昭和八年十月三十一日 發行  
實驗漢方醫學叢書 (非賣品)

著者 久米 崑

發行者 和田 利彦  
東京市日本橋區通三ノ八

編 者



印刷者 氣賀 林一  
東京市日本橋區通三ノ八

發行所

東京市日本橋區通三ノ八  
(電) 日本橋五一六四一、三七七八  
振替 東京一六一七七八

春陽堂

東京市神田區 秀康印合刷會資會社

# 本草學論攷

全五冊

理學博士 白井光太郎著

時代の推移は翕然として本草學への考究を必須とする時、斯學の第一人者、唯一の存在なりし白井先生の老成なる著作全集を刊行するは誠に學界並に現代文化の最大榮譽とすべきもの。先生の該博なる學識、廣汎深遠なる研究は正に本草の最高權威、無二の祕寶である。その多年に亙る精密詳細なる研究は如何なる専門家にも全くその類を見ず、而もその内容は決して乾燥なる學究に止らず一般の本草文化、その文獻、歴史の考證、探査より、醫學、植物學、文學等の諸々の範域にも鋭く深き理解を有せられ、その貴重なる諸文獻は今全くそれを容易に手にし難き學問的稀觀本をも普ねく涉獵し盡せる忠實なる編輯は、白井博士の高弟矢野宗幹氏によりて完成せられ、名實共に日本學界の驚歎すべき大收獲と稱すべきもの。専門家が座右に必備すべきは固より、汎く一般植物、醫學の凡ゆる方面に對しても眞に精讀すべき大著述として廣く江湖諸賢に推薦すること眞に切である。

發行所

東京日本橋通三ノ八  
振替東京一六一七

春陽堂

- ・第一冊……史 傳 篇
- ・第二冊……植 物 篇
- ・第三冊……花卉・植物病理篇
- ・第四冊……天然記念物・紀行篇
- ・第五冊……醫 藥・考 古 篇
- ・定價 各冊 金四圓五拾錢
- ・送料 各冊二十二錢
- ・菊判・總クロス洋裝函附
- ・總頁各冊約六百頁
- ・全卷豫約募集(申込金不用)
- ・分賣ハ致シマセン



# 日本民間藥集覽

帝國女子醫學藥學  
專門學校藥學科編

▲本書は帝國女子醫學藥學專門學校藥學科の編纂に成れるものにして主として同校植物教授久内清孝氏並藥學博士塚本勉夫教授の指導の下に同校醫・藥學兩科の全學生を擧げて全国各地に産する動・植・礦物の民間藥用に供するもの、材料・分布・用法・用藥分量等凡そ民間藥研究に必要なあらゆる資料を調査報告せしめたるものを集大成編輯したるものである。從て本邦各地に現在行はれてゐる民間藥の現状を知る爲め此の詳細なる事實としての記録は藥劑師は勿論の事、藥學、動・植・礦物學等の究研に従事する者の研究資料として常に座右に備ふべきものである。

【本書の特長】・一、全国各地の民間藥用材料の種類・分布を知り得る事・一、材料に對する各地獨特の藥用法及方言を知り得る事・一、民間藥材料索引及病名索引の附してある事等。民間藥研究資料唯一の寶典なり。

東京市日本橋區通三ノ八  
振替東京一六一七

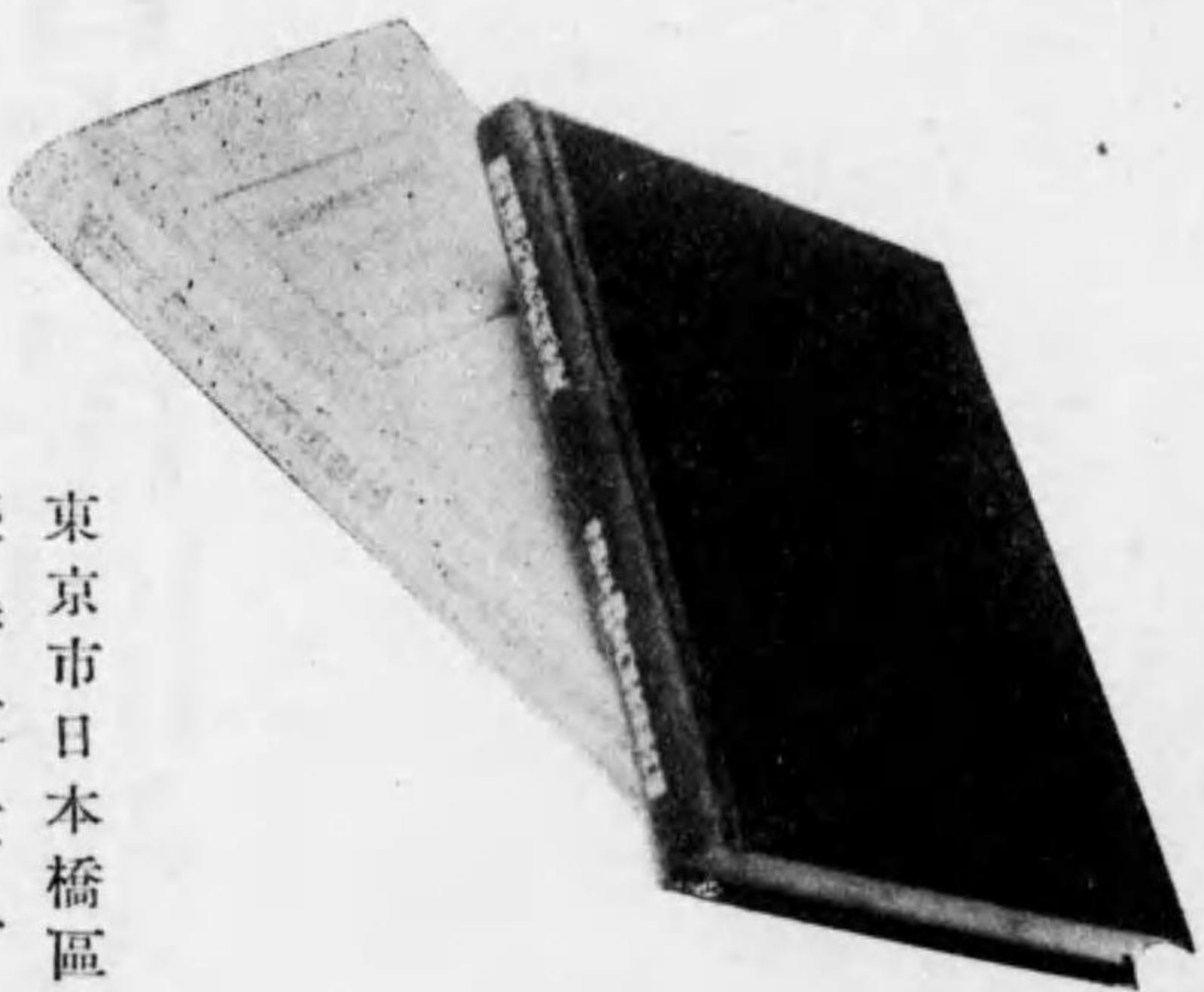
春 陽 堂 發 行

▲定價 金壹圓六拾錢  
送料市内 金拾四錢  
▲菊判總クローズ、洋裝  
▲病名索引、材料索引付

▲本書は例へば或一つの病氣に對して如何なる民間藥が用ひられて居るか、亦一つの民間藥材料が如何なる病氣に用ひられてゐるか、本邦各地の民間藥材料、用法を知るには索引と相俟ちて至極便利なるものなり。

# 藥用和漢名對照便覽

帝國女子醫學藥學專門學校藥學科編



實物見本

▲定價 金貳圓五拾錢  
▲送料 市内一圓四錢 地方一二錢  
▲菊判 二百七十七頁・洋布裝

▲本書は帝國女子醫學藥學科塚本藥學博士監督の下に本草綱目啓蒙其他の文獻より漢名を蒐集し更に其出典を一々明記し且和名の方言・異名を添加しある上、和名・漢名の索引を附し其何れよりも引き出せる様編纂しあれば讀書子も藥業者も植物學者も和名・漢名を知る上に便利此上も無き辭典である。

東京市日本橋區通三ノ八  
振替東京一六一七

春 陽 堂



終